

スケープゴートの発生におけるグループ心性及びメンバーの原子価の影響に関する実証的研究

岡 島 真 一*

An Empirical Study On The Relationship between
The Scapegoat Phenomenon and Valency

Shinichi Okajima

要 旨

本研究は、D - グループ (Diagnostic Group) におけるスケープゴート現象の心理力動に関する実証的研究である。

Bion (1961) の集団理論、特に作動グループ、および基底的理想グループ理論に基づき、D - グループの心的活動を特徴づけた。D - グループの根源はフランス学派 (CEFFRAP) の代表であるAnzieuとその同僚の「groupe de diagnostic」あるいは「診断グループ」にある。

またBion (1961) の原子価 (valency) 理論に基づきD - グループ参加者のパーソナリティを特徴づけた。D - グループに対して、基底的理想尺度 (baGS) を実施し、基底的理想グループ (基底的理想タイプ：依存基底的理想、闘争基底的理想、逃避基底的理想、つがい基底的理想) のタイプを測定した。次にD - グループに対してスケープゴート測定尺度を実施し、グループのスケープゴート現象の発生および、スケープゴート (scapegoat) を測定した。

闘争基底的理想グループにおいてスケープゴート現象が発生するという仮説に基づき、結果を吟味した。そして、スケープゴートは闘争基底的理想グループに貢献できない原子価を持つという仮説から、スケープゴート本人の原子価 (Valency) をVAT (Valency Assessment Test) によって測定し、スケープゴートと原子価の関係を求めた。

I. 問題

本研究の目的は、臨床心理学の観点から、グループにおけるスケープゴート現象の発生要因と、スケープゴート現象発生グループにおいてスケープゴートにされる人物の特性を明らかにすることである。

スケープゴートをテーマとした臨床心理学的研究は日本には少ない。「スケープゴート」という名称を用いた実証的な研究をレビューすることは困難である。しかしながら日本では「いじめ」への取組みというテーマを掲げた研究が多く成されている。

平成19年9月28日受理 *奈良市スクールカウンセラー・北野病院神経精神科

いじめが社会問題とされている今日では、いじめを解決する為に、教育現場、心理学、社会学、数理工学等、様々な分野から取り組みが成されており前田、今井による『群集化交友集団のいじめに関するエージェントベースモデル (非線形問題)』では、一元的な管理主義が支配する学校の中では自由に価値を見出すことが難しく、また集団が群集化することがあり、群集化の影響が価値を共有できない少数の子どもをいじめのターゲットにしてしまうと結論づけられている。また、管理を弱くしてエージェント (グループメンバー) に多様な価値を見出すことが許されるようにすることは、逆に価値を共有できないエージェントの数を増加させる可能性がある。その原因はエージェントの相互作用にあると工学的な観点から述べられている。

姉崎、前田、牧野らによる『集団の群集化が引き起こすいじめ問題のシミュレーション分析 (高齢者支援/肢体不自由者支援/一般)』では、集団にある程度の価値観の多様性を認めると、いじめは起こりやすくなることが分ったと工学的観点から述べられている。

本論文はまず定義される必要のある4つの根本的な概念から構成される。すなわち、「スケープゴート (scapegoat)」、「スケープゴート現象」、「Bionのグループ理論における基本的概念」、「D-グループ」である。

Ⅱ. スケープゴート現象における概念

1. スケープゴートの定義

心理学辞典によると「スケープゴートscapegoat」は、贖罪の山羊のこと。転じて、集団が危機に直面したとき、集団内の欲求不満を解消したり他の集団成員が自責の念をまぬがれるための非難・攻撃の対象となる内集団の特定の成員のこと。実際の問題解決から目を逸らすことにつながる。スケープゴートの典型的な例として、経済破綻の危機に直面したドイツで、ナチスが問題のすべてをユダヤ人の国際的陰謀のせいにしてユダヤ人を非難・攻撃したことをあげることができる。

またウェブスター博学大辞典によると、「他人の失敗や罪の責任をとらされたり、または他人の代わりに苦しませられる」人を指す。このことからスケープゴートは責任を転嫁するための身代わりであり、不満や憎悪の対象にされてしまう個人あるいはサブグループのことだと定義される。

Bion (1961) によれば、心理力動的アプローチに賛成しているほとんどの筆者は、スケープゴートが彼 (彼女) が所属しているグループの投影した、望まれない側面 (衝動、感情、動作、印象など) のための入れ物の役割を演じるという解釈を共有する。スケープゴートの存在は、それに対してグループの攻撃性を向けることを可能にし、そしてグループの緊張、恐怖、および不安レベルを減少させる。

Shulmanによると、スケープゴートはしばしば非常に挑発的であり、その結果、彼 (彼女) 自身がスケープゴート現象に活動的に参加しようとする。同様に、Eagle & Newton (Idid.) は、スケープゴートが集合的な投影同一化 (Klein, 1946) の受け皿の役割を果たし「これらのスケープゴートが、投影同一化の標的にされるための行動を示し、彼ら自身のスケープゴート現象に貢献している傾向がある」とした。

また、一般的な見解では、ある集団内で暴力・嫌がらせなどのいじめがあった時には、その対象となる人間には何らかのスケープゴータピリティ（スケープゴートになりやすい特有のパーソナリティ）があり、それが原因となったという考えがある。しかし、そのスケープゴータピリティは、具体的に見てみると特に原因となるものではなく、誰にでもあるような要素であることが多い。また、どんなときもどんな集団においてもスケープゴートにされる普遍的な特性や傾向（スケープゴータピリティ）が明確にされることはない。よってこのようなスケープゴートとなりえる普遍的なパーソナリティが存在するとは言えない。

2. スケープゴート現象の定義

「スケープゴート現象」とは広義の意味ではグループ自体が抱える問題をグループ内の個人あるいはサブグループに身代わりとして押しつけ、結果として根本的な問題解決ができない状況を指す。また集団文化の特徴としては、規則に縛られて個人に自由がないところや、警察や軍隊や政党のような、組織が一体となって敵と戦わなければならないような集団においてスケープゴート現象が起きやすいという経験的な推測がある。しかし、このような特徴を持つ組織においても常にスケープゴート現象が発生するわけではない。

スケープゴート現象の発生には、スケープゴート本人の性質という観点にとどまらず、集団文化が重要な役割を果たしていると考えられる。スケープゴート現象は集団文化の影響とそれに適応しスケープゴート現象を行う人とスケープゴート本人の相互作用の産物である。以上のことから、スケープゴート現象とは、集団文化に適応した者が集団文化に不適応した者を排除しようとする一連の過程であると定義される。

3. Blonのグループ理論における基本的概念

Bion (1961) は、1946年にLondonのTavistock Clinicでのグループ活動（実験）を基本にして、グループ行動の研究についての集団理論を生み出した精神分析家である。

Bionの基本的な発見は、あらゆるグループ活動には「作動グループ (work group, 以下WG)」と「基底的想定グループ (basic assumption group, 以下baG)」という対照的な機能的水準が同時に存在するということである。しかし、ここでの「グループ」という用語は、「特殊な心的活動のみを包含するものであり、その作業に携わる人々を意味するのではない」(Hafsi訳)。

3-1. 「作動グループ (work group, WG)」

WGは、グループのメンバーが自ら「協同 (cooperation)」し、作業に不可欠な知識、訓練、経験、技能をもち、(初歩のものにせよ) 科学的な方法を用いて「基本的作業 (basic task)」(たとえば、治療、練習等) に没頭しているグループを形容する心的活動である。さらに、WGの下で活動しているグループは、作業による欲求不満に対する耐性、「経験から学ぶこと (learning from experience)」時間の流れと発達 (変化) を意識したり、重視したりすることによって特徴づけられる。換言すれば、WGは、現実と関係をもち、現実原則に基づく活動である。Bionは、これらのWGの特徴が、Freudによって記述された自我の特徴に類似すると述べている。

Bionによれば、グループは、常にWG活動の条件を満たしている訳ではない。WGはグループの存続や発達のために不可欠なのだが、苦痛を伴うので、グループはそれを回避しようとする。その際に、グループが頼るのは、WGと同時に存在する、無意識的、衝動的、幻想に基づく心的活動、すなわちbaGである。その結果、baGはWGを阻止し、両グループの間に力関係、すなわち「勝ったほうがグループを支配する」という関係が成立する。

Bionによれば、WGは「強力な情緒的衝動の特性を共有するある他の心的活動によって阻止され、回避され、ときには支持される。これらの活動は、一見したところでは混沌としたものであるが、もしそれがグループ全体の共通の諸基底的理想から発していると仮定すれば、ある程度のまとまりのあるものになってくる」(Hafsi訳)とある。換言すれば、現実原則に基づくWGは、強力な情緒的衝動を示す心的活動であるbaGによって阻止され、回避されることがあり、ときにはWGがbaGを利用することによってbaGに支持されることがある。このようなグループの活動は、一見したところでは混沌としたものであるが、グループの複数の基底的理想=basic assumption (依存基底的理想、闘争・逃避基底的理想、つがい基底的理想)から発せられていると仮定すれば整理しやすくなるということである。

3-2. 「基底的理想グループ (basic assumption group, baG)」

baGには、3つの異なった類型がある。すなわち「依存基底的理想 (basic assumption of dependency, baD)」、「闘争・逃避基底的理想 (basic assumption of fight/flight, baF)」と「つがい基底的理想 (basic assumption of pairing, baP)」である。この3つの異なった類型を「基底的理想」と称する。

それぞれのbaGについて詳細に論じる前に、baGの共通点について記述する。現実に基づくWGと異なってbaGにおけるグループ活動は、幻想に基づいている。その幻想の内容は支配的になっている「基底的理想」によって異なる。また、baGの場合、時間と発達という側面が重視されず、それらに対する意識さえ欠如している場合がある。さらにbaGの下で活動しているときのグループは、「経験から学ぶこと (learning from experience)」ができないうえに、それを試みようともしない。なぜなら、学習に必要な欲求不満に対するグループの忍耐力が不十分もしくは、欠如しているからである。換言すれば、baGは一定の「基底的理想」に基づいている。グループメンバーに共有される基底的理想は幻想であり、それは①リーダーシップのスタイルとそれに対するメンバーの態度、②メンバー同士の関係とグループと外部との関係、③グループの自己認知、④グループの時間の概念、⑤グループの基本的作業に関する考え等の側面に反映される。⑥経験から学ぶ能力の欠如、⑦時間と発達への無関心も特徴である。

baGは、グループに属することの体験による精神病的不安 (妄想分裂的不安と抑うつ不安) に対する原始的な防衛反応と、それに伴う愚かさの特徴づけられる心的状態に相当するものである。

1) 「依存基底的理想 (baD)」

baDの下でグループ全体に共有される理想あるいは幻想は、グループが未熟で、他者の援助が

なければ何もできない、そして（リーダーを含む）他者が全能、全知であると信じ込むことにある。グループが、外界を非友好的で、冷たく感じると同時に、「物質的・精神的な援助や保護のために依存しているリーダーに指示されるために集まった」（Bion, 1961: Hafsi訳）かのように感じたり、振る舞ったりすることに相当する。

換言すればbaDの影響下にあるグループは、無力感、低い自己評価、消極性、モチベーションの低下などの抑うつ的な事象を含む心的状態に陥り、グループの形式・非形式的リーダー、セラピスト、トレーナーなどの人物を理想化し、貪欲に彼らに頼っていく。しかし、このようなグループの貪欲な要求、あるいは依存のニーズに満足に応じることができなければ、リーダーは、すぐグループに過小評価され、否認され、変えられることになる。リーダーに対してけっして満足しないので、グループは次々新しいリーダーを絶えず探し続ける。この場合、グループは「最も病的なメンバーを選んで」しまうことになる。このように、baDが支配的になっているグループは、Melanie Kleinによって記述された原始的理想化、貪欲、否認、羨望などの早期の精神病的（特に、妄想・分裂的）態勢における防衛過程によって特徴づけられる。baDにおいてグループは、リーダーを理想化し全知的、万能的な存在、能力を持っている人であると確信し、グループの依存的欲求に対する拒否を、リーダーの能力の欠如によるものではなく、グループに対する無関心や「愛情のなさ」の結果として体験する。そして、羨望と貪欲の投影によって、グループはリーダーを羨望に満ちた悪い、貪欲な対象、あるいは「マイナス・コンテナ（minus container）」として体験するようになる。

2) 「闘争・逃避基底的理想 (baF)」

闘争と逃避は一般的には正反対の反応であると思われるが、Bionはそれらを統合し、1枚のコイン（基底的理想）の裏と表のように考えた。baFグループの特徴的な幻想は、グループ内部あるいは外部に何らかの「恐るべき望ましくない対象」または「敵」が存在するので、その対象と戦う（闘争）か、それともそれを避ける（逃避）しかないという信念に相当するものである。グループの風土は、疑惑、非難、言語的攻撃という闘争的な側面と、セラピスト（あるいは幻想的な敵）に対する受身的な抵抗、長い沈黙、グループの作業回避という逃避的な側面によって特徴づけられる。さらにbaFにおいて、「個々」の重要性は「グループ全体」に比べて二次的である。baFグループは、グループ存続のために個々を犠牲にすることがある。それは、グループは、個人に自由を与えることによって、メンバー間の意見相違が表現され、そしてグループ内の葛藤や戦いが引き起こされることを恐れるからである。なぜなら葛藤や戦いがグループを全滅させるという不安をグループに引き起こすからである。Kernberg (1980) が述べているように、グループは「多数のメンバーに共有されるグループの観念形態に対するいかなる抵抗も許すことができない」（Hafsi, 2004）。

このような個人よりもグループを優先する心性は、原始的社会における生け贄という具体的な儀礼に相当する。いずれの場合も、グループは個人を犠牲にすることによってグループを守ろうとする。逸脱者に対してグループは、攻撃的な操作とスケープゴートリングに頼ることによってそのメンバーの逸脱を阻止する。なぜなら、グループにとって、個々の逸脱は脅威として感じら

れるからである。潜在的攻撃をスケープゴートに向けることによって、グループはメンバーの逸脱を阻止し、全滅恐怖を回避することができる。メンバーの逸脱は、一種の挑発的行為や、脅威としてグループに体験される。またスケープゴートの発見あるいは「創造」という作業はリーダーに任される。baFにおけるリーダーは、漠然と認知される外部または内部の「敵」といかに戦うかあるいは逃げるのかに対して能力を発揮できると思われる人である。換言すれば、リーダーは、危険と敵を識別し、そして、「今・ここ」において敵が存在しないときは、それを作り出すように期待される。実際に、リーダーは、個々の反応を無視し、グループ全体の存続のために全力を尽くすこと、勇気、自己犠牲、敵に対する憎しみを促進することが期待される。このような期待に応じることができないリーダーは無視され、よりふさわしい者が選ばれることになる。なぜなら、リーダーは、支配的な基底的理想の生産物であるので、基底的理想を反映することを期待されるからである。

baFにおいて一般に用いられる防衛機制は、Melanie Klein (1955) によって記述された、「分裂」(良いグループと悪い対象)、「投影同一化」、「否認」「理想化」である。分裂と投影同一化によってグループは、攻撃性とそれによる不安や恐怖(望ましくない部分)をスケープゴートまたは敵に投影し、それを否認する。その結果、グループは、「望ましい部分」を含むグループに同一化し、それを理想化し、Anzieuの言う「グループ幻想 (illusion groupale)」を示すようになる。baFにおいてグループは、「弱さ」に耐えられず、それを軽視したり否認する。「弱さ」の存在は、個人の軽視とグループの凝集性を要求するbaFの心性に反するからである。したがって、グループはそれを感じた場合、すぐ投影同一化を用いて対処する。グループの「弱さ」を含む対象としてグループに体験されるメンバーは、グループの憎しみと怒りの標的となる。

尚、本論文においては、便宜上、Stock&Thelen (1958)、Armeliu&Armeliu (1982) や Hafsi (1997) の提案を採用し、「闘争基底的理想baF」と「逃避基底的理想baFI」を別々に扱うこととした。これは、敵を意識しているという意味で2つのグループは同じ幻想に支配されているのだが、反応の仕方が異なるため、それぞれ異なるタイプとして特徴付けられるという理由からである。baFグループは、グループ内の敵、あるいはグループ外の敵に対する批判を並べ立てることに長い時間を費やす。そして、グループの幻想に合わない発言は無視される。一方で、沈黙するメンバーがグループ内の敵として選ばれれば、それを責め、理由を問いただすことに集中する。baFIグループでは、敵と戦うことよりも、むしろその状況から逃れることが重要であると考えるので、観察されるのは、より消極的な抵抗の現われとしての沈黙、また無関係な事柄に没頭することによる作業からの逃避、会話を避けたりリラックスしたりするための冗談や笑い等である。また、退屈そうにしたり、寝ているメンバーがしばしばみられる。

3) 「つがい基底的理想 (baP)」

「つがい (pair)」という言葉が示唆するように、baPは、2人の関係、それに対するグループの幻想とその結果であるグループの態度と風土に関するものである。

baPは最も理解されていないものである。その理由は「つがい」という曖昧かつ誤解を招きやすい用語にある。baPは、2人のメンバーが中心的な存在として発生し、そして2人の意識的・

無意識的な活動を支えていく風土がある。その2人が必ずしも男女である必要はない。また、必ずしも現実にグループのメンバーのなかにつながりが存在する必要はない。

グループの幻想は、グループの存続と将来が、新たに生まれてくるであろうリーダーに依存するという信念に相当するものである。Bionによれば、グループにとって、そのリーダーは、「救世主的 (Messianic)」な存在、あるいは「救世主 (Messiah)」である。この救世主は、人間とは限らず、グループを不安と恐怖から救う新しい観念、計画、提案、発明を意味する場合もある。したがって、グループは、その「救世主」の誕生を期待することという無意識的な作業にほとんどのエネルギーを費やす。グループにおけるつがいの任務は、その「救世主」を創造あるいは産むことである。

しかし、baPにおいて、つがいという明確な存在は、必ずしも不可欠な要素ではない。換言すれば、「今・ここ」におけるグループのメンバー同士によって形成されたつがいの存在が必要なわけではない。つがいの存在以外のbaPの特徴は、①未来への強い関心、希望と期待。②親しみ、過度な幸福感、楽観主義に満ちたグループの雰囲気である。

baPにおける未来への関心や意識は、「今・ここ」の作業と関係なく、救世主・リーダーの誕生への漠然とした幻想的な期待と希望に基づく感情である。

baPグループの活動の目的は、その希望の実現ではなく、それを持ち続けることである。グループは、希望の実現が希望の喪失と同等であるとみなすので、希望はけっして満たされてはならない。救世主が出現しても、グループを不安や恐怖から救うことはできないという痛ましい事実によりグループは直面し、そして希望や、存続する意欲を失ってしまう。したがって、グループはあらゆる方法を用いて、一生懸命にその希望を、実現の可能性から守り続ける。グループにとって救世主の出現は破壊的な出来事である。

けっして産まれてはいけない救世主に依存するというパラドックス的な信念や思考は、他の基底的想定と同様に、グループの機能不全、発達の見失などの特徴をもった心的状態、愚かさにも満ちたグループ風土へ導く。

旧約聖書を例にあげれば、旧約聖書全体を通じての預言は、「救世主が来る」である。しかし、旧約聖書は、人々が「救世主」の到来を望んだところで終わっている。

4) 「基底的想定グループ (baG)」のまとめ

グループは常に2つの水準を含む心的活動を示す。第一水準の作動グループ (WG) は、①現実、あるいは「現実原則」に基づき、②グループの目的や目標、時間の観念を念頭に置き、③適切かつ洗練された科学的手段を用いて、作業を行う。このような意識的かつ表だった活動にはメンバーの「協同」や、作業を行うために必要な訓練、知識、技能、熟練が不可欠である。

基底的想定グループ (baG) は、作動グループ (WG) とは対照的に、現実に基づいているのではなく、快感原則や一定のグループ幻想、あるいは「想定」に基づいている。baGには、訓練、知識、技能、熟練が不要である。baG活動への参加には、「協同」ではなく「原子価 (valency)」のみが不可欠である。

3-3. 「原子価 (valency)」の定義

Morenoは、社会の基本的構造を、原子のネットワークとして記述している。更に、Bionも、化学から「原子価valency」という概念を借用し、人間の対人関係や個人とグループとの結合の説明を試みた。

Bionは、人間が、原子と同様に原子価を持ち、原子同士のように、その原子価によって結合すると考え、原子価を、「確立した行動パターンを通じて、他者と瞬間的に結合する個人の能力」また「基底的思想を創り出したり、それに基づいて行動したりするためにグループと結合していくための個人の準備状態 (readiness)」(Hafsi訳)と定義している。Bionはすべての人には原子価があり、原子価のない人は、精神的機能からみれば、もはや人間ではないと述べている。

原子価のタイプは基底的思想のものと同様であり、「依存dependency (DV)」、「つがいpairing (PV)」、「闘争・逃避fight/flight」が存在する。

しかしながら、これは、人が1つの類型しか示さないという意味ではない。人はすべての原子価を示すことができるが、自分に一番適し、そしてそれに同一化できる類型が1つしかないという意味である。Bionは個人に一番合った原子価を「支配的な原子価」と呼んだ。その後、Bionの集団論に基づくさまざまな実証的研究を行ってきたStock & Thelenは、「闘争・逃避」を「闘争 (FV)」と「逃避 (FIV)」に分離させ、4つのタイプになるタイポロジーを提案した。上述された4つの原子価の特徴を以下に述べる。

1) 依存dependency (DV)

「依存dependency (DV)」は、自分以外の頼りになる他者やリーダー、環境に依存する。また、人に受け入れられることや愛すること、グループに属することに関する強い欲求をもち、周囲に自分の行動を合わせようとする傾向がある。他にも、人の役に立ちたい願望、自己非難、低い自己評価や自尊心、過去思考、援助を必要とする人に対する過敏さや理解などがあげられる。依存の主要な特徴は、縦的人間関係や相互作用、相互作用的依存、低い自己評価、他者の過剰評価である。

2) 闘争fight (FV)

「闘争fight (FV)」は、常に「敵」を意識し、「敵」に対して攻撃的で、人の上に立ちたいという強い願望がある。また、自己中心的に物事を考え、他人に頼ることを嫌い、負けず嫌いの傾向がある。グループの中では仕切り役にまわることが多く、現実思考である。対人関係は、自己主張、攻撃性、敵意、競争心、批判によって特徴づけられる。

3) 逃避flight (FIV)

「逃避flight (FIV)」は、闘争と同様、「敵」を意識するが、「敵」に対して逃げるという行動を起こす。人と常に一定の距離を保ち、人との深い付き合いを避け、何事に関しても1人でやる傾向がある。他にも、プライバシーや私生活に触れられること、時間や予定に縛られること、人からアドバイスをされること、期待されることや、ルール、規則、決まりごとを嫌う。

4) つがいpairing (PV)

「つがいpairing (PV)」は、自分と他者との二者関係を重視し、親しい友達関係に対する強い欲求や、所有欲があり、孤独感を感じやすい性格のため、縦的な関係より横的な関係を望好む。また、異性の友達を好み、楽観主義で、自由と平等を重視し、民主主義的なリーダーシップを好む。つがいの対人関係は、温かい、親しい関係を好み、対象と個人的なレベルで付き合いたいという願望、小集団を好み、民主主義、平等主義、関係を性愛化する傾向があげられる。

4. D-グループ

4-1. D-グループの定義

D-グループの根源はフランス学派 (CEFFRAP) の代表であるAnzieuとその同僚の「groupe de diagnostic」あるいは「診断グループ」にある。HAFSIはその英訳である「diagnostic group」をD-グループと省略して用いた。D-グループは1人のトレーナーと2人の観察者からなる精神分析的指向のTグループである。Tグループとの相違点は、D-グループでは「二次的過程」だけでなく「一次的過程」をも取り扱われ、解釈の意味からグループの力動と、グループの「今・ここ」(here-and-now)における隠れた意味をも同時に把握することを認める点にある (Anzieu, 1984)。

4-2. 構造

D-グループでは、3~15日間に、90分のセッションが5~20回行われる。グループ構成は、(原則として互いに見知らぬ)7人から16人のメンバー、1人のトレーナー、および場合によってコ・トレーナー、2人の観察者からなる。メンバーとして適するのは、集団心理学とその方法について知識を得たいと願うすべての人である。通常精神分析を行う場合よりも広い部屋と、参加者の人数分の椅子が用意され、椅子は円形に並べられる。観察者は、各セッションにおけるグループ過程を明確にするための記録を行う。

4-3. 目的とルール

D-グループの目的は、集団心理学に対する、特に経験的な知識を提供することによって、心理的現象に対する参加者の鋭敏化を目指すことである。参加者は単に心理的現象を知るのではなく、対象としてのグループを体験し、それについて考え、理解していく過程を経ることによって、心理的現象を理解するための技術の一つを身につけることができる。従って、参加者は伝統的な教育法のように一方的に教えられるのではなく、自ら集団現象を発見するよう導かれる。

D-グループのルールには通常精神分析における主な基本的原則が適用されるが、グループという条件に適合するよう多少修正が加えられたもので、「表現の自由原則」(rule of free speech)、「禁制原則」(rule of abstinence)、および「返還原則」(rule of restitution)、そして、これらすべての原則を保証し、かつ個人のプライバシーを守るための「守秘義務の原則」である。(Anzieu, 1971)。

表現の自由原則とは、参加者がそれぞれ自身を自由に表現し、また他の参加者のそれに注意を

傾けるということであり、禁制原則とは、セッション以外のあらゆる状況下において、必要とされる形式的、かつ社会的な関係（例えば教諭・学生関係）を除く、すべての個人的（性的、友好的、または攻撃的）な活動を制限するものである。返還原則はそれに通じるもので、もし参加者がセッション以外の状況下において、セッション中の出来事、あるいはグループに関するその他のあらゆる事柄について触れた場合には、次回のセッションにおいてその内容を報告する義務を負うというものである。これは欠席者についても同様であり、欠席者は次回のセッションにおいて欠席理由を報告しなければならない。つまりグループに関するあらゆる事柄はグループの所有であり、それをグループ外へ持ち出すことは原則として禁じられる（禁制原則）。そして、もしそれを犯した場合には、必ずグループへその所有物を返還しなければならない（返還原則）という前提が存在する。

これらのルールが、まず最初にトレーナーから参加者に伝えられ、全員がそれを確認したうえで第1セッションが開始される。

Ⅲ. 仮説

仮説1：グループの基底的想定が闘争基底的想定グループの傾向があるとき、そのグループにスケープゴートが発生しやすい（そのグループ全体のスケープゴート得点が高くなる）であろう。

仮説2：個人の原子価がグループの基底的想定に一致しないときに、その人はスケープゴートになりやすい（その人のスケープゴート得点が高くなる）であろう。

Ⅳ. 方法

1. D-グループの実施

1-1. 参加者、およびグループの構造

・参加者

大学生、92名（男=53、女=39）がD-グループに参加した。彼らは心理学に関する講義の受講生で、セッションはその一環として行われた。

・グループ構造

参加者は、男女の区別なく、10から12名ずつに振り分けられ、8つのグループ（グループ1～グループ8）が構成された。セッションは、2005年9月から12月にかけて実施された。原則として週一回、連続した2コマの講義時間（90分×2）が使用された。1コマを1セッションとし、休憩を挟んで1回に計2セッションが行われた。1グループにつき5セッション、延べ40セッションが実施された。

講義の成績評価に関しては、参加者全員に等しく単位が与えられ、開始前に、その内容は参加者に伝えられた。

1-2. セッション室のデザイン

セッションは、奈良大学社会学部棟内の大実習室（窓がなく防音設備の整った）において実施された。

部屋の中央に、円を囲むような形で椅子を配置し、メンバーはトレーナーを含めて、円になって座り、2人の観察者はその外側に配置された椅子に座る。本研究では、1つのグループのメンバーを学生10人から12人とし、メンバーにはAからLまでのアルファベットを振り当てている。メンバー用の椅子の背もたれにはそれぞれのアルファベットを表示する用紙が貼られた。

1-3. 目的とルールの説明

第1セッション開始前に、トレーナーからメンバーに対して、前述したD-グループの目的と意味についての説明が行われた。

2. アンケートの実施

D-グループが始まる前に、機会を設け、メンバーの原子価を測定するための尺度VATを実施した。これによってメンバーのパーソナリティ類型が測定された。そして、セッション終了ごとに2つの尺度を実施した。1つ目にグループの基底的想定をはかるためにbaG尺度（baGS）、2つ目にソシオメトリックテストを実施した。以下に詳細を述べる。

2-1. VAT (valency Assessment Test)

VATの原型であるRGST (Reaction to Group Situation Test) はBionの理論に基づいてStock & Thelenの手によって開発された個人の原子価を測定する文章完成法テストである。後にHafsiが全ての項目を整理して日本語訳した。

2-2. baG尺度 (基底的想定尺度=baGS)

基底的想定尺度を作成するために、Bionを含む幾人かの研究者の理論的かつ臨床的研究に基づいて、まず各基底的想定グループの特性を書きとめ、そしてそれらを質問項目に書き直し、5段階尺度を作成した。次に、Bionの理論を知っている研究者4人によって、尺度の内容の妥当性が吟味された。

2-3. ソシオメトリックテスト

セッション終了ごとにメンバーにソシオメトリックテストを実施した。二つの質問項目からなる。各メンバーに「特に気が合わないと感じた人は誰ですか」、「今回のセッションにおいてわがままに感じた人は誰ですか」という質問を含むアンケートを実施した。他のメンバーからこの項目において選択されたメンバーには1項目につき各1点が与えられる。この質問項目において多くのメンバーから回答された人をスケープゴートとした。この得点からグループ内でスケープゴートとされている人を定義した。次にグループ内のメンバーの各スケープゴート得点の合計をそのグループの「グループスケープゴート得点」とした。これによってグループがスケープゴート

をする雰囲気にあることを定義した。

V. 結果

表 1. 基底的想定尺度の因子分析

	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子	第 5 因子
Factor 1: Work					
・グループは緊張していた。	.87	-3.721E-02			
・グループは納得できるまで話し合った。	.851	-6.099E-02			
・メンバーはお互いから学ぶことが多かった。	.814	-4.833E-02			
・グループは時間を有効に使うとした。	.807	-3.483E-03			
・グループは皆で決めた話題について、積極的に意見を述べようとした。	.789	-.122			
・グループは皆が決めたやり方に従おうとした。	.761	-.206			
・グループは皆で決めたことに積極的に参加しようとした。	.752	5.672E-02			
・グループは欲求不満であった。	.711	.136			
・グループには皆の意見が尊重されるような雰囲気があった。	.616	-.199			
Factor 2: Fight					
・グループはトレーナー（先生）に対して腹が立っていた。	-9.444E-02	.856	1.038E-02		
・グループの雰囲気が悪くなるがあった。	1.282E-02	.850	4.996E-02		
・グループは否定的な感情を表すことがあった。	-4.117E-02	.847	4.604E-02		
・グループはイライラしていたときがあった。	-8.586E-02	.814	6.145E-02		
・メンバーはお互いに攻撃的になることがあった。	-2.030E-02	.799	-5.366E-02		
・グループは皮肉を言い合うことがあった。	-7.390E-03	.787	.104		
・グループは仲良くしようとしていた。	5.729E-02	.625	2.559E-03		
・グループは議論が盛り上がるように積極的に参加しようとしていた。	-.115	.591	.106		
Factor 3: Dependency					
・グループはリーダーの指示や提案に従おうとした。		2.765E-02	.856	3.275E-02	
・グループ内の話し合いはリーダーを中心にまわっていた。		.127	.824	.101	
・グループはリーダーの指示を期待していた。		6.207E-02	.774	.177	
・グループはリーダーを守ろうとした。		-.148	.734	.233	
・皆がグループの進め方を、リーダーの役割だと思っていた。		-9.934E-02	.687	.245	
・皆がグループの雰囲気に合わせようとした。		.192	.668	-.124	
・グループの話し合いの内容は個人のことが多かった。		.307	.470	-.158	
Factor 4: Pairing					
・グループは特定の気の合いそうなメンバーを頼りにしていた。			.201	.861	2.583E-02
・グループは数人のメンバーだけで成り立っていた。			8.306E-02	.845	.154
・会話は特に気の合いそうなメンバーを中心にまわっていた。			.163	.840	1.345E-02
・グループはなるべく本音を言わないようにしていた。			2.350E-02	.439	.418
Factor 5: Flight					
・グループは否定的もしくは批判的な意見を避けようとした。				7.337E-02	.766
・グループはなるべく対立を避けようとしていた。				.102	.721
・グループは批判を言うメンバーをなるべく相手にしようとしなかった。				.122	.536
・グループは雰囲気を和らげようとしていた。				-.326	.533

baG尺度の因子分析をおこない表 1 に示した。

以下は「基底的想定尺度=baGS」の信頼性を吟味するために用いた方法である。

・方法

- ①対象：大学生90名（男=51；女=39）で、10人から12までの人数からなる6グループである。各グループは、6のD-グループセッション（1セッション=70分）（Hafsi, 2004）を体験した。
- ②手続：一つのセッションが終わると、セッションに関する感想と「baGS」を配布し、記入を

求めた。記入時間は5分であった。

③結果：尺度の信頼性分析の結果としては、 $\alpha = .836$ であった。

次に「基底的想定尺度」(baG尺度)の全36項目に対し、主因子法による因子分析(varimax回転)を行い、5つの因子が抽出された。第一因子はグループが意識的で、現実中心性があり合理的な方法及び成員が協同して活動する項目を含むので「WG」、第二因子はグループにおいて怒りや不満を覚え攻撃的になる項目を含むので「baF」、第三因子はGpのリーダーへの依存的な項目を含むので「baD」、第四因子はグループにおける特定のメンバーの関係、それに対するグループの幻想に関する項目を含むので「baP」、第五因子はグループにおいて葛藤を避ける項目を含むので「baFI」と名づけた。baG尺度から全8グループ各5セッションの基底的想定が測定された。

表2. 各セッションにおける基底的想定尺度とスケープゴート得点(一元配置分散分析の結果)

グループセッション	基底的想定グループとスケープゴート得点				F値	有意確率
	依存基底的想定	闘争基底的想定	つかい基底的想定	逃避基底的想定		
セッション1	1.6957	3.8182		2.2000	5.187	.007
スケープゴート得点	(2.0314)	(1.2504)		(2.6997)		
セッション2	1.7143	3.4444	2.2000		2.920	.059
スケープゴート得点	(2.3515)	(3.0529)	(3.8239)			
セッション3	2.9091	3.2667	1.6000		3.282	.043
スケープゴート得点	(3.0245)	(3.4323)	(1.2879)			
セッション4	1.2903	2.5455	1.1905		3.647	.032
スケープゴート得点	(1.5098)	(1.5075)	(1.3273)			
セッション5	1.1429	3.5833	2.2308		5.518	.006
スケープゴート得点	(1.2682)	(3.2321)	(2.3547)			

注：数値は平均値（ ）内は標準偏差

前述した仮説である「グループの基底的想定が闘争基底的想定グループの傾向がある場合はグループのスケープゴート得点が高くなる」ことを検証するために、全8グループのセッションごとの諸基底的想定と「スケープゴート得点」の関係について一元配置分散分析を行った。

表2に示されたように第1セッションは、 $(F(2,87)=5.187; p<.001)$ であった。第2セッションは、 $(F(2,88)=2.920; p<.05)$ であった。第3セッションは、 $(F(2,80)=3.282; p<.05)$ であった。第4セッションは、 $(F(2,60)=3.647; p<.05)$ であった。第5セッションは、 $(F(2,63)=5.518; p<.001)$ であった。

結果、すべてのセッションにおいて闘争基底的想定グループのときに「グループスケープゴート得点」が有意に高かった。

次に本人の「原子価がグループの基底的想定に一致しないときにスケープゴート得点が高くなる」という仮説を検証するために以下の分析をした。

全グループ各セッションにおけるメンバーを、グループの支配的基底的想定に一致した原子価

をもつ人と一致しない人に分類し、両群をt検定で比較した。その結果、原子価が一致しない人の群の方が「スケープゴート得点」が有意に高かった。その結果はTable 4に示されているように、第1セッションは ($t(85)=2.504$; $p<.01$)であった。第2セッションは ($t(87)=6.758$; $p<.00$)、第3セッションは ($t(85)=2.310$; $p<.01$)、第4セッションは ($t(66)=4.302$; $p<.00$)、第5セッションは、原子価が基底的理想と一致しない人の群の方が平均値は高かったが有意ではなかった。

表3. セッションにおけるスケープゴート得点と原子価の関係 (t検定の結果)

各セッションスケープゴート得点	原子価と基底的理想尺度の関係		t値	有意確率(両側)
	一致する場合	一致しない場合		
第1セッション スケープゴート得点	1.93 (2.09)	3.02 (1.97)	2.504	.014
第2セッション スケープゴート得点	1.61 (1.91)	4.90 (2.64)	6.758	.000
第3セッション スケープゴート得点	2.68 (1.77)	4.08 (2.99)	2.310	.023
第4セッション スケープゴート得点	1.56 (1.70)	3.33 (1.55)	4.302	.000
第5セッション スケープゴート得点	1.61 (2.41)	2.12 (2.25)	.841	.403

注: 数値は平均値 ()内は標準偏差。

セッションにおけるスケープゴート得点と原子価の関係 (t検定の結果)

計8グループ、92名(男53名、女39名)であった。このメンバーに対して原子価測定尺度VATを行い原子価を測定した。各メンバーの原子価はDV(依存原子価)が多く見られた。

表4. 原子価の分布

度数	原子価			
	依存 (DV)	闘争 (FV)	つがい (PV)	逃避 (FIV)
	55名	22名	11名	1名

VI. 考察

対象とした学生の原子価をみると逃避原子価は、1人しかいなかった。その理由は、統計的に逃避原子価が希少であることと、グループがランダムに構成されているからだと思われる。今後の課題は各原子価をグループに均等に配置する必要があるということである。また日本人は依存原子価の比率が高いという経験的推測があり、本研究においても依存原子価の度数が多い。

諸基底的理想と「スケープゴート得点」の関係について一元配置分散分析をした結果、全グループのすべてのセッションにおいて闘争基底的理想グループの「スケープゴート得点」が有意に

高かった。

次に、「基底的理想と本人の原子価が一致しない人の群」と「基底的理想と本人の原子価が一致する人の群」をt検定によって比較すると、第1セッションから第4セッションにおいて一致しない群のスケープゴート得点が有意に高かった。

このことから基底的理想と一致しない原子価をもつ群がスケープゴートになりやすいということがわかった。第5セッションにおいて有意差がでなかった理由は、第5セッションがメンバーにとってグループワークの最後のセッションであることから、メンバーの緊張感が薄まり、スケープゴートへ、不満や不安を投影をする必要がなくなっているという可能性がある。

この結果からいじめを理解するためのいくつかの示唆が得られた。すなわちいじめの発生にはグループ文化の影響があり、その文化に貢献できないときにいじめの標的となる。いじめが起こったときには、いじめる人といじめられる人の2者関係にとどまらず、グループ全体の問題として介入する必要があると考えられる。

日本において近年、「いじめ」に対する関心が高まっている。いじめとは、imidiasによれば、集団関係のなかで立場や力の弱い者をターゲットにして精神的・身体的な攻撃を執拗に加えることをいうが、学校でのいじめが問題化するようになったのは1980年代以降である。

校内暴力が沈静化した83年ころから注目されるようになり、85年には発生件数がピークに達し、いじめに起因すると見られる自殺も9件を数えた。

特に「葬式ごっこ」でその異様さが注目された中野富士見中鹿川君事件（86年）は、この時期のいじめを象徴するものであった。それ以来、件数はピーク時に比べて減少したが、深刻な教育問題とされてきた。

なかでも93年の山形県新庄市でのマット死事件と、94年の愛知県尾西市での「同級生にいじめられ110万円以上の現金を取られた」という遺書を残して自殺した事件は衝撃的で（どちらも犯罪とよぶべきだという意見もある）、以来、衆院文教委員会での「いじめ問題集中審議」、文部省の「いじめ対策緊急会議」の緊急アピールと報告、首相官邸での「児童・生徒のいじめ問題に関する関係閣僚会議」の開催等、政府、文部省をはじめ関係各省庁や各県教育委員会の対応が活発化することになった。

文部省所管の国立教育会館に、いじめ問題に関する情報提供や電話相談を行う「いじめ問題対策情報センター」が新設され、また、総務庁は関係省庁連絡会議を開催し、「家庭教育電話相談」（文部省所管）、「子ども・家庭110番」（厚生省所管）、「青少年補導センター」（総務庁所管）、「子ども人権オンブズマン」（法務省所管）など各種相談機関の活用と連携強化を図ることを確認した。

さらに、文部省の「児童生徒の問題行動等に関する調査研究協力者会議は96年7月に「いじめの問題に対する総合的な取組について」と題する報告を公表し、いじめ対策として、家庭や地域との連携や学校全体での対応の重要性を指摘し、学級編制替えや転校といった措置も必要だと提言した。

グループのスケープゴート現象の発生を回避することが困難であることを認め、発生の際には、現在起きていることがスケープゴート現象だと指摘し、その原因を探索することで、

スケープゴートिंगをした側も受けた側も、人間的に発達できる可能性がある。学校においては、いじめをなくそうとか、あってはならないことだと強調しすぎると、教師も子どももそれを隠そうとするだろうし、親もなるべくそれを見ようとしない危険性がある。グループにおけるスケープゴート現象の発生が不可避であることを受け入れ、みんなが共有して、起こった時にみんな、対処できるようにするように方向付けられることが解決の一助となるのではないかと考える。

参考文献

- Anzieu,D., 1984. *Le group et l'imaginaire groupal*. Paris; Bordas.
- Bion,R.f., 1961. *Experiences in groups and other papers*. New York: Basic Books.
- HAFSI,MED 『ビオンへの道標』
- HAFSI,MED 『愚かさの精神分析 ビオンの観点からグループの無意識をみつめて』
- HAFSI,MED 『対象関係の病理学を理解する頂点としてのマイナス原子価』 *プシコフィリア研究* 第3巻
- Hafsi,M., 1998., *The Group Valency Constitution,the Dominant Basic Assumption,and the Scapegoating Phenomenon*.
- R, ブラウン著『グループ・プロセス 集団行動と集団間行動』
- 前田義信 今井博英『群集化交友集団のいじめに関するエージェントベースモデル (非線形問題) An Agent Based Model on the Bully of Mobbed Classmates』
- 姉崎、前田、牧野『集団の群集化が引き起こすいじめ問題のシミュレーション分析 (高齢者支援/肢体不自由者支援/一般) Multi-agent simulation on a school bullying emerged from the mobbed group』
- 黒崎優美 (1998) 『D-グループ (Diagnostic Group) におけるグループ過程の測定法の開発、検証、および応用』
- 高橋哲郎/訳 (1982) 『ビオン入門』
- 対馬忠訳著 (1973) Bion,R.f., 1961. 『グループ・アプローチ:《集団力学と集団心理療法》の画期的業績・人間援助の心理学』東京:サイマル出版会
- 西村達也 (1988) 『基底的思想とスケープゴート現象の因果関係』
- 船越弘子 (2004) 『家族・グループの力動と摂食障害の発生~Wilfred Bionのプロトメンタル・システム理論に基づく実証的研究~』

付記

本論文の作成に当たり、一方ならぬご指導を賜りました、奈良大学大学院社会学研究科教授、Med Hafsi 先生に心より感謝申し上げます。

D-グループの参加者および、D-グループの実施と、アンケート実施の準備に関わり、苦勞をともにした先輩、後輩、同級生、すべてのみなさまに感謝の気持ちをささげます。